

山月記

○作者 中島敦について

1909 年、**東京都**に生まれる。**儒家**の一族で、父も漢文教師であり、**漢籍**の素養を持つほか、西洋や国内の文学の素養にも優れている。**第一高等学校**に入学後、文学の習作に励むが、このころから喘息に悩まされ始まる。その後東京帝国大学文学部国文科に進み、卒業後は横浜高等女学校に就職して国語や英語のほか、歴史や地理なども教えていた。このころ創作活動に励むものの作品はあまり世に知られず、教職を辞してパラオ南洋庁の書記官として赴任。その後、1942 年に雑誌「文学界」にて「**山月記**」、「文学禍」を発表して本格的な文壇デビューとなる。その後、「**光と風と夢**」を発表し、文壇の注目を集めた。このほか、中国の古典を題材とした「**悟浄嘆興**」「**名人伝**」「**李陵**」、パラオでの見聞を活かした「**南東譚**」などを書いているが、喘息の発作により心臓に負担がかかり 33 歳の若さで死去。

○作品「山月記」について

作者の文壇デビュー作。中国唐代の伝記小説「**人虎伝**」をもとに書いたもの。

○場面 1

1. 李徴の人柄は？

優秀で、若くして科挙に合格(博学で才知が優れている)
自分の考えに固執し、他人と強調しない。狷介な性格。
自負心、自尊心が強い

2. 李徴の夢は？

詩家としての名を死後 100 年に残すこと。

3. 役人をやめた後の現実とは？

文明はあがらず、生活に困窮

4. 生活に困った李徴はどうしたか

再び一地方官吏となる→妻子の衣食住のため、詩業に半ば絶望した。

5. 役人に戻った李徴を待ちわびていた現実とは？

かつての同輩たちはすでに高位につき、自分がかつて鈍物として歯牙にもかけなかった連中の命令を聞かなくてはならなくなっていた。

6. 5 の現実を受けて、李徴はどうなったか

自尊心を傷つけられ、ますますわがままになり、挙句の果てに発狂して行方不明になった。

○場面2

1. 袁惨とは？

監察御史→官吏を取り締まる官

2. 「残月の光を頼りに」という月の描写の効果は？

朝まだ早い時間であることを印象付け、虎との出会いの場合の危うさを表す。

3. 袁惨に躍りかかろうとした虎の正体は？

李徴

なぜわかったか：李徴が「危ないところだった」と李徴の声がし、その言葉に危うく友を食
い殺すところだったの意が含まれていたから。

4. 李徴にとって袁惨とはどういう存在か

最も親しい友。同年に進士の第にのぼった

(李徴とは正反対の性格)

5. 李徴がしばらく返事をしなかったのはなぜか

- ・自分が異類の身となったことを認め、それをさらすのが恥ずかしい
- ・友と話したい、話を聞いてほしい

→この二つの思いのせめぎ合い。葛藤があったから

6. 李徴と再会した袁惨の行動は？

馬から降り、草むらから出てこない理由を聞いてから、李徴の話を前の友の時のように聞いた後、なぜ虎になったのかを聞いた。

※なぜ怪しまなかったのか：虎の語調が李徴だった。行方不明だった李徴を見つけた安心感。
袁惨の性格が素直だった。

○場面3

1. 李徴が発狂した時の様子を、李徴目線でとらえる。

一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。

声が闇の中からしきりに自分を招く。

覚え、自分は声を追うて走り出した。

無我夢中でかけていくうちに、いつしか道は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走っていた。何か体中に力が満ちたような感じで、軽々と岩石を飛び越えていった。

気が付くと、手先やひじのあたりに毛を生じているらしい。

少し明るくなってから、谷川に姿を映してみると、既に虎となっていた。

→無意識のうちに変身していた。

2. 「懼れた」のはなぜか

今までの自分を体現した姿がまさかの虎だったから。

どんなことでも起こりえないから。

3. 李徴は、生き物(人間)の定めをどのようなものだと考えているか

理由もわからず、押し付けられたものをそのまま受け取って、理由もわからず生きていくもの

(運命に翻弄される無力さと不条理に対するおそれ →無意識に湧き上がってくるおそれ)

4. 「自分はすぐに死を思うた」とあるが、それはなぜか

人間が運命に翻弄されるだけの無力な存在ならば生きる意味がないと思ったから。

5. 「自分の中の人間」という時の「人間」とは何か

理性があり、かつて人だった時にできた思考ができるときの自分。

人間としての感情、心

6. 李徴は、虎として自分の行いをどのように感じているか

情けなく、恐ろしく、憤らしい

7. 「これは恐ろしいことだ」とあるが、それはなぜか。

人間としての思考が失われつつあるから。(人間性喪失に対する恐れ)

→思考の末に呼び起された感情としての恐れ

8. 「俺の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、おそらくその方が、俺はしあわせになれるのだろう」とあるが、それはなぜか

虎としての自分の行いや虎になってしまった自分の運命に苦悩せずに済むから

※「しあわせ」に傍点がついているのはなぜか：苦しみから逃れられるという意味

9. 本文中、「俺」と「自分」とはどのように使い分けられているのか。

自分→人としての自己

俺→虎としての自己

○場面 4

1. 李徴が袁慆に話した「1つ頼んでおきたいこと」とはどのようなことか

自分が作った詩を伝録してほしい

※「死んでも死にきれない」という言葉から推測できることは？：詩業に対する強い執着

2. 「旧詩を吐き終わった」という表現から、李徴のどのような様子がうかがわれるか

強い執着心をもって心の中にため込んできたものをすべて出し切った様子

3. 李徴の即席の詩はどのようなものか

・七言律詩

・押韻 逃 高 豪 嗥 →初句末は踏み落とし

・頷聯と頸聯は対句

・一字不重用を破る

・尾聯(7,8句)→李徴の心情を象徴的に表している(題名に)

○場面 5

1. 「思い当たることが全然ないでもない」とあるが、「思い当たること」とは端的に言うとか

我が臆病な自尊心と尊大な羞恥心

2. 「臆病な自尊心」とはどのようなものか

自尊心が強すぎて自尊心が傷つけられる事態が起こることを極度に恐れる心理のこと。

3. 「尊大な羞恥心」とはどのようなものか

自分が恥をかくような事態を避けるために、あえて偉そうにふるまって人を遠ざけようとする心理のこと。

4. 「己の珠にあらざることを懼れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず」とはどういうことか

※珠…美しい宝石→才能に優れている人のたとえ

※刻苦…非常に骨を折ること

自分の才能を磨く努力をしても、自分が光り輝く宝石になれなかったからと思うと怖いので、あえて才能を磨く努力をしなかったということ

5. 「己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかった」とはどういうことか

※瓦…石ころ、値打のない人→才能のない人

※伍する…肩を並べる

自分はほかの人たちとは違い、才能があると信じるがゆえに凡人と肩を並べるのはプライドが許さなかった。

6. 「人間は誰もが猛獣使いであり、その猛獣にあたるのが、各人の性情だ」とあるが、これはどういうことか

人は皆、自分の内面に激しい性質や負の感情、欲望などを抱えており、それをうまく制御しながら生きているということ。

7. 「それを思うと、俺は今も胸を焼かれるような悔いを生じる」とあるが、「それ」とはなにを指すか

才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦をいとう怠惰によって自らの才能を磨く努力を怠り、詩家として大成するチャンスを失ってしまったこと

8. 「俺の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない」とあるが、これはどういうことか

自分が後悔や悲しみの涙を流したということ

○場面6

1. 「お別れする前にもう一つ頼みがある」とあるが、それはどのような頼みだったのか。

妻子に「李徴は死んだ」とつたえ、その後の妻子の面倒を見てやってほしいということ。

※なぜ本当のことを言わないのか：自分に会わせないため(虎の自分を見られたくない)、人としての自分は死んだため

※慟哭…声をあげて激しく泣きわめくこと

2. 「本当は、まず、このことのほうを先にお願いすべきだったので、俺が人間だったなら。」とあるが、李徴にとっての人間とは何か

自分のことだけでなく、周りの人のことも考えられるもの

3. 袁慄に対し、「今の姿をもう一度お目にかけよう。」といった李徴の意図は何か

自分にもう一度会おうと思わせないようにするため

→李徴が最後に見せた人間性とも考えられる

○場面7

1. 「懇ろに別れの言葉を述べ」た時の袁慄の心情はどのようなものか

もう二度と李徴に会えない→これまでの思い出や李徴に対する友人としての様々な思いがこもっている

※悲泣…深い悲しみに泣くこと

2. 「白く光を失った月」が象徴するものは何か

「人間としての李徴」の終わり

虎としての心に支配されていくさま。希望の喪失

※咆哮…猛獣などが大声で吠えること。

語句

故人…昔馴染

久闊を叙する…久しぶりの挨拶をする

愧赧…恥じて赤面する

意に沿う…要求に応じる

齒牙にもかけない…無視して相手にしない。問題視しない。

恃む(たのむ)…期待する。あてにする。

残月…明け方まで空に残っている月

あわや…危うく

所行…おこない。